

創刊十年分総目次（※頁番号は各記事の冒頭頁）

〈二〇一五年〉単発

第一号

- 『窮理』の出版、おめでとつ 江沢 洋 二頁
 プラスからゼロへ、マイナスへ 冗談物理学序説 亀淵 迪 八頁
 野の花と温室の花 細谷 暁夫 一七頁
 ファラデーとアインシュタイン 統一への前奏 米谷 民明 二三頁

第二号

- 三浦梅園と湯川秀樹 佐藤 文隆 二頁
 戸田盛和先生を偲んで 佐藤 正知 一〇頁
 大学ランキングと英語 河東 泰之 一七頁
 J R 鶴橋駅と素粒子論 橋本 幸士 二四頁

〈二〇一六年〉単発

第三号

- 時を隔てた共同研究 米沢 富美子 二頁
 武谷三男さんの思い出 小沼 通二 一〇頁
 宇宙人は攻めてくるのか 吉田 直紀 一八頁
 戸塚洋二さんとの出会い 佐々木 閑 二七頁

第四号

- 私の古典探索 窮理学師江漢 池内 了 二頁
 ガールフレンド 亀淵 迪 一二頁
 「予想通りで驚いた」重力波初観測の報道に接して 真貝 寿明 一八頁
 中谷宇吉郎余話 杉山 滋郎 二六頁
 自然哲学復権の秋の到来 佐々木 力 四四頁

〈二〇一七年〉単発

第五号

「わかる」という意味 須藤 靖 二頁

海外生活の思い出話 荒木 不二洋 一一頁

藤沢周平と落語 岡崎 誠 一八頁

金米糖と戸田盛和先生 渡辺 慎介 二八頁

第六号

かのように 村上陽一郎 二頁
 父の思い出 朝永 惇 一〇頁

アブダスサラム博士との日々（前編） 亀淵 迪 一九頁

物理学が言語に出会った話 千葉と梶山の母音研究（前編） 前川喜久雄 二六頁

第七号

科学リテラシー 北原 和夫 二頁
 百年前の楽譜 藤原 美子 一〇頁

アブダスサラム博士との日々（後編） 亀淵 迪 一五頁

柳家小三治と藤沢周平の生活感 岡崎 誠 一三頁

物理学が言語に出会った話 千葉と梶山の母音研究（後編） 前川喜久雄 三三頁

第八号

非線形科学と物理学 蔵本 由紀 二頁
 一つの履歴 吉田 夏彦 一二頁

地球の歴史と物理学 鎌田 浩毅 一九頁

力学史と科学革命論（前編） 有賀 暢迪 二七頁

〈二〇一八年〉単発

第九号

- 太陽活動と気候の関わり 桜井 邦朋 二頁
 この世界に多様性をあたえるモノゴト 斎藤 成也 一二頁
 水槽から見透す数理 初田 哲男 一八頁
 南方熊楠への旅 村上 浩一 二三頁
 力学史と科学革命論（後編） 有賀 暢迪 三三頁

第一〇号

- 戸塚洋二先生の思い出 梶田隆章 二頁
 忘れられない朝永さんの言葉 原康夫 八頁
 私の窮理学 高木隆司 一七頁
 チバニアンと松山基範、そして寺田寅彦 前中一晃 二四頁
 第一号

- 科学史は役に立つか 西尾成子 二頁
 自然哲学と音楽 安孫子誠也 一〇頁
 物理三題断ABC 岡崎誠 一八頁
 語り得ぬ在り方 杉尾一 二八頁

（二〇一九年）単発

第二号

- 生物学と物理学 田口善弘 二頁
 ただひたすら哲学する 野矢茂樹 九頁
 フルートの運指表と音程 兵頭俊夫 一七頁
 太平洋戦争前後の湯川秀樹 岡本拓司 二六頁

第三号

- 物理ジャーナルの来し方行く末 早川尚男 二頁
 在りし日の断想（前編） 山崎和夫 一三頁
 我が名は究理 本川達雄 二三頁
 青桐 岡村浩 二六頁

- 三村剛昂…「波動幾何学」に至るまでの足跡（前編） 小長谷大介 三四頁

（二〇二〇年）単発

第四号

- 激動のバリ一九六八年 政池明 二頁
 在りし日の断想（後編） 山崎和夫 一二頁
 幼児から学んだこと 齋藤暁 二二頁

科学雑誌「自然」の思い出 石川昂 二八頁

- 手書きの文字 谷村省吾 三七頁
 三村剛昂…「波動幾何学」に至るまでの足跡（後編） 小長谷大介 四二頁
 第五号

- マスターアルゴリズムと汎用人工知能 松田卓也 二頁
 寺田寅彦と日本の古典随筆 島内裕子 一〇頁
 江戸の宇宙論二人の窮理学（前編） 長崎通詞の志筑忠雄 池内了 一七頁
 チューリングと寺田寅彦 近藤滋 二八頁
 第六号

- 宇宙三題断…暗黒物質・重力波・原始ブラックホール 佐々木節 二頁
 江戸の宇宙論二人の窮理学（後編） 金貨し升屋の山片蟠桃 池内了 九頁
 旅の楽しみ 亀淵迪 二〇頁

- 岡潔と中谷治宇二郎 学問を支える友情 高瀬正仁 二六頁
 論理学に魅せられて 高木翼 三五頁

（二〇二一年）単発

第七号

- 人工知能と社会 甘利俊一 二頁
 リモート授業で安政コロリ体験記を読む 塩村耕 一二頁
 数学と時間 黒川信重 一八頁
 露伴、寅彦、宇吉郎と父小林勇（前編） 小松美沙子 二八頁
 第八号

- 「寺田物理学」の現代的意味 寺田寅彦と複雑系科学 松下貢 二頁
 北欧の日々・ワグネルとの出会い 山崎太郎 二三頁
 悲運の原子核物理学者花谷暉一の足跡 政池明 二三頁
 露伴、寅彦、宇吉郎と父小林勇（後編） 小松美沙子 三三頁
 第九号
 雨が降る理由 木村龍治 二頁

シュレーディングガーの墓碑銘…実在と認識 細谷暁夫 一二頁

私は世界であり私である。そして… 早川博信 二二頁

松根東洋城と「洪柿」俳句 渡邊孤鷲 三〇頁

戦後における広大理論物理学研究所の再建 小長谷大介 三九頁

〔二〇二二年〕単発

第二〇号

和食に潜むソフトマター科学 好村滋行 二頁

辞書の効用について 亀淵迪 一〇頁

寺田寅彦と怪異 横山泰子 一八頁

色についての不思議三題 高木隆司 二七頁

わが国における「火災学」の系譜 関澤愛 三四頁

第二一号

「自然界の縞模様」に光を当てる 川上紳一 二頁

単純化とバランス 自然科学と人文科学 千葉俊二 一二頁

私の宝物（前編） 亀淵迪 二二頁

滑稽窮理 臍の西国 明治初頭の啓蒙書ブームと増山守正 真貝寿明 三〇頁

「間違いないが、正しくはない」論理 岡本秀穂 四〇頁

第二二号

ニールス・ボーア研究所にて 金子邦彦 二頁

朝永振一郎・ゲーテ・「科学にひそむ原罪」 小沼通二 一二頁

私の宝物（後編） 亀淵迪 二〇頁

ハイゼンベルクの核開発 政池明 三〇頁

コーヒークップの物理学 中西秀 三九頁

〔二〇二三年〕単発

第二三号

「パンドラの箱」を開けてしまった重力理論研究者たち 前田恵一 二二頁

来し方を振り返って 坂井修一 一〇頁

ボルツマンのピアノ、連続と離散 稲葉肇 一八頁

徳島科学史研究会の四〇年 私的覚書 西條敏美 二四頁

「哲学者の時間」の行方 アインシュタインとベルクソン 平井靖史 三三頁

第二四号

関東大震災から百年 尾池和夫 二頁

関東大震災を今に伝える 災害と復興、そして現在 武村雅之 一一頁

高木ミエ ある女性物理学者の軌跡 古川安 二〇頁

雑考 偶然と必然と 亀淵迪 三〇頁

人は自然理解（世界理解）を極め得るか 北原和夫 三八頁

〔二〇二四年〕単発

第二五号

窮理考 ファウスト寸劇余話 亀淵迪 二二頁

リアリテイ一九四九年の日本文学・物理学 島田一平 一一頁

ロゲルギストの卓越性を授業で再現するための工夫 内田麻理香 二〇頁

宣長・秀雄・秀樹 主観と客観とをめぐって 今野真二 二八頁

アクティブマター物理学による經典的信条からの脱却 西口大貴 三八頁

第二六号

朝永振一郎「物理学とは何だろうか」第三章第三節を読んで 佐々真一 二頁

虫・鳥と生活する 今野真二 一〇頁

天文学と『銀河鉄道の夜』 谷口義明 二〇頁

ユクスキュルの環世界論と物理学 釜屋憲彦 三一頁

〔二〇二五年〕単発

第二七号

オッペンハイマーの謝罪と回想 山崎正勝 二頁

人工知能狂想曲 細谷晴夫 一一頁

湯川秀樹の歌に学ぶ 松村由利子 二〇頁

ヒトとイヌの関わり 動物文化史の観点から 溝口元 二八頁

原子論について デモクリトスとハイデガーの観点から 武井徹也 三二六頁
第二八号

物理学者とエッセイの系譜 永田和宏 二頁
発見と驚きと感動の記述 蜂飼耳 一二頁
サイエンスライターという職業 二人の先人想いを馳せて 五十嵐美樹 一八頁
フアラデーに学ぶこと 市村禎二郎 二六頁
寺田寅彦「随筆難」と父 花輪昭太郎 三四頁
演劇「光子の裁判」 渡辺美帆子 四三頁

小連載

- 「堀内壽郎と欧州留学生生活 量力学・重力学・ナチス台頭」 杉山滋郎 (二〇二〇—二二年)
(一) 第一五号・二九頁
(二) 第一六号・四〇頁
(三) 第一七号・三八頁
(四) 第一八号・四一頁 (終了)
- 「論文」の無い科学者・桑木或雄「伊藤憲二 (二〇一五—一六年)
(一) 初期の業績と物理学史的背景 第一号・四〇頁
(二) ヨーロッパ留学と相対論 第二号・三九頁
(三) 物理学・哲学・科学史 第三号・四四頁 (終了)
「愛知敬一と『電子の自叙伝』」 伊藤憲二 (二〇一七年)
(一) 吾輩は電子である 第五号・三六頁
(二) チャールズ・ギブソンのこと 第六号・三三頁
(三) エーテルと電子 第七号・四〇頁 (終了)
- 「水野敏之丞と『電子論』」 伊藤憲二 (二〇一七—一八年)
(一) 著者と文体 第八号・四四頁
(二) 電気学と電子論 第九号・四六頁
(三) 電子論と「富国強兵」 第一〇号・四二頁 (終了)
- 「菊池泰二と真空管」 伊藤憲二 (二〇一八—一九年)

- (一) 若き物理学者の死 第一一号・四六頁
(二) 真空管と物理学 第一二号・四五頁
(三) ダイナトロンとブライオトロン 第一三号・五〇頁 (終了)
- 「仁科芳雄と日独青年物理学者たち」 伊藤憲二 (二〇二〇—二三年)

- (一) 朝永振一郎と親方の温情 第一四号・五八頁
(二) W・クロルと台湾 第一五号・五四頁
(三) K・ビルスと戦前日本の外国人研究者 (前編) 第一六号・五六頁
(四) 渡邊慧と寺田物理学 (前編) 第一八号・五八頁
(五) 湯川秀樹の渡欧 (前編) 第二〇号・五四頁
(六) 湯川秀樹の渡欧 (後編) 第二二号・五七頁 (終了)
- 「世紀前の日本の物理学とアインシュタイン来日」 伊藤憲二 (二〇二二—二三年)

- (一) 第二二号・五八頁
(二) 第二三号・五〇頁
(三) 第二四号・五五頁 (終了)
- 「仁科芳雄をめぐる旅」 伊藤憲二 (二〇二四年—)
- (一) 里庄浜中とその周辺 (前編) 第二五号・六三頁
(二) 里庄浜中とその周辺 (後編) 第二六号・六四頁
(三) 岡山市 (前編) 中学校と鳥城 第二七号・六一頁
(四) 岡山市 (後編) 第六高等学校 第二八号・六八頁

連載

- 「随筆遺産発掘」 細川光洋 (解説) (二〇一五—二三年)
(一) 御殿の生活 中谷宇吉郎 (解説・編集部) 第一号・四八頁
(二) 窮理日記／科学者の日記 寺田寅彦 第二号・四八頁
(三) 京の山 湯川秀樹 第三号・五二頁
(四) 綿菓子 平田森三 第四号・五四頁

- (五) 春と埃り 石原純 第五号・五四頁
- (六) 鳥獸戯画 朝永振一郎 第六号・五二頁
- (七) 自然研究の楽しみ 藤原咲平 第七号・五六頁
- (八) アカシヤの記憶 吉田洋一 第八号・五四頁
- (九) 中金の豚鍋 大河内正敏 第九号・五四頁
- (一〇) 自分の痕跡 戸塚洋二 第一〇号・五〇頁
- (一一) 素人藝について 湯浅年子 第一一号・五四頁
- (一二) 江戸時代のめんこ 中谷吉郎 第二二号・五四頁
- (一三) 海鳴り 中谷治宇二郎 第三号・六二頁
- (一四) 水のしづくの行衛 田丸卓郎 第四号・六六頁
- (一五) 良審判官の必要 長岡半太郎 第五号・六四頁
- (一六) 模倣と創造 本多光太郎 第六号・六四頁
- (一七) 初めてヨーロッパ 田中館愛橘 第七号・六六頁
- (一八) 奇術二つ 中村清一 第一八号・六六頁
- (一九) 海の不思議と海流(抄) 宇田道隆 第一九号・六八頁
- (二〇) 南洋と浦島太郎(抄) 日下部四郎太 第二〇号・六四頁
- (二一) 「稲むらの火」の教方に就て(抄) 今村明恒 第二二号・六八頁
- (二二) 父子天文夜話の一節(抄) 関口鯉吉 第三号・六八頁
- (二三) 海底紀行 坪井忠二(窪井祐二) 第三号・六〇頁
- (二四) 寺田先生のこと 矢島祐利 第二四号・六二頁(終了)
- 『本読みえんたんぐる』尾関章(二〇一七年)
- (一) 19世紀の革命家、20世紀科学にもつれる 第五号・六二頁
- (二) 大学の在野精神を求めて「鎌倉」からミルに至る 第六号・六二頁
- (三) 科学の「役立つ」をジェイン・ジェイコブズに学ぶ 第七号・六二頁
- (四) アガサと清張、ミステリーで知る緩いシステムの妙 第八号・六二頁
- (五) 進化と量子で知る人間という小さくて大きな存在 第九号・六二頁
- (六) エコと国際 熊楠が先取りした二つのこと 第一〇号・六二頁

- (七) 「動物福祉」、その源流をたどって賢治に至る 第二一号・六二頁
- (八) 街の起伏という微分の愉悅(タモリから荷風へ) 第二二号・六二頁
- (九) 椎名麟三の近代、GAF Aの脱近代 第三号・七四頁
- (一〇) 科学者に二派ありまして：フンボルト・ガウス考 第四号・七四頁
- (一一) 菊池正士新書本を古書店で買い、今日的に読む 第五号・七四頁
- (一二) コロナ時代のベスト的、もしくはカミユの状況 第六号・七二頁
- (一三) 月から見た地球、南極から見た国 第七号・七二頁
- (一四) 実存主義と量子力学、その微妙なもつれあい 第一八号・七四頁
- (一五) 少年が大海の孤島に登場する物語は理系っぽい 第一九号・七六頁
- (一六) シュレーディンガー、墓碑の重ね合わせ 第二〇号・七二頁
- (一七) 宇宙は(いま・ここ)、夢やロマンじゃない 第二二号・七六頁
- (一八) メルケルとファインマンの知恵比べ 第三号・七六頁
- (一九) あるべきものがあるべき場所にあること 第三号・七〇頁
- (二〇) 古い新書で原子力「善悪」二分論を問う 第二四号・七四頁(終了)
- 『音楽談話室』井元信之(二〇一五年)
- (一) 芸術家と社会性 第一号・三三頁
- (二) ロシアとユダヤと科学と音楽と 第二号・三一頁
- (三) ショパンの少年時代 第三号・三七頁
- (四) ショパンの青年時代 第四号・二六頁
- (五) 和声学と量子力学 第五号・四五頁
- (六) 錯覚と音楽① 第六号・四三頁
- (七) 錯覚と音楽② 第七号・四八頁
- (八) 天体の音楽 第八号・三四頁
- (九) お宝と贋作① 第九号・三八頁
- (一〇) お宝と贋作② 第一〇号・三三頁
- (一一) 日本最古のピアノ 第一一号・三八頁
- (一二) 日本のピアノ導入の黎明期 第二二号・三五頁

- (一三) アインシュタインとハイゼンベルク 第一三三号・四〇頁
 - (一四) ハイゼンベルクのピアノ演奏 第一四号・四九頁
 - (一五) 量子コンピュータ 第一五号・四六頁
 - (一六) 寺田寅彦のオルガン 第一六号・四七頁
 - (一七) ケーベル先生(一) 第一七号・四八頁
 - (一八) ケーベル先生(二) 第一八号・四八頁
 - (一九) ケーベル先生(三) 第一九号・四八頁
 - (二〇) 耳はスベアナか? 第二〇号・四四頁
 - (二一) 聴覚の謎 第二一号・四八頁
 - (二二) バッハの弟子 第二二号・四八頁
 - (二三) バッハ平均律は平均律にあらず 第二三三号・四一頁
 - (二四) 平均律は越えられるか? 第二四号・四五頁
 - (二五) 春の琴始め 第二五号・五四頁
 - (二六) ラフマニノフとスクリャーピン 第二六号・五三頁
 - (二七) 作品より人生を鑑賞する 第二七号・五三頁
 - (二八) AIは人間並みの芸術作品が作れるか? 第二八号・六〇頁
 - 『窮理のことは』 今野真二(二〇二五年)
 - (一) 人・言語・思考 日本における源流を探る 第二七号・七八頁
 - (二) 全体は部分の総和たり得るか 第二八号・八八頁
- 「コラム連載」
- 『紙魚の塵』 胡瓜庵散人(二〇二五年)
 - (一) 題字解題 第一号・表紙裏
 - (二) 天然居士の哲学 第二号・表紙裏
 - (三) 知りたくないの 第三号・表紙裏
 - (四) 映画と政治と数学と 第四号・表紙裏
 - (五) 『馬鹿』 第五号・表紙裏
 - (六) 世の繋がり 第六号・表紙裏

- (七) リルケと露伴の「別世界」 第七号・表紙裏(終了)
- 『窮理逍遙』 佐藤文隆(二〇二七年)
- (一) はじめてのガイジン 第八号・表紙裏
- (二) フィリップ・モリソンの笑顔 第九号・表紙裏
- (三) 猫に小判のホイラー「京都講義」 第一〇号・表紙裏
- (四) 追憶のソ連物理学 第一一号・表紙裏
- (五) ペンローズの大きなサイン 第一二号・表紙裏
- (六) シュラムの「億ション」 第一三三号・表紙裏
- (七) ルフィニの故郷 第一四号・表紙裏
- (八) トリニティのマスター・ディナー 第一五号・表紙裏
- (九) ワーナーとインゲ 第一六号・表紙裏
- (一〇) そだちのいいバーナード 第一七号・表紙裏
- (一一) さようならホンゼラール 第一八号・表紙裏
- (一二) 人情に濃いビレンケン 第一九号・表紙裏
- (一三) 驚いたシルクの喝 第二〇号・表紙裏
- (一四) 息の長い量子語り手のハートル 第二一号・表紙裏
- (一五) いつもかつこいいターナー 第二二号・表紙裏
- (一六) ポスドクのウンルーとの出会い、お互いに「おめでとう」 第二三三号・表紙裏
- (一七) ゼルドビッチの高弟ノビコフとスニヤエフ 第二四号・表紙裏
- (一八) バロージャ一家の亡命 第二五号・表紙裏
- (一九) ルドルフ・パイエルスと湯川のスナツツ写真 第二六号・表紙裏
- (二〇) むかし気質のエーラー 第二七号・表紙裏
- (二一) 才気あふれるリンデ 第二八号・表紙裏
- 『窮理の種』 永橋禎子(一〇四)／川島禎子(五〇)(二〇二五年)
- (一) ラムネの抒情 第二号・五五頁
- (二) 三毛の幻 第三号・五九頁
- (三) 水晶と心太 第四号・裏表紙裏

- (四) ヨーロッパの記憶 第五号・裏表紙裏
- (五) 胡蝶の夢 第六号・裏表紙裏
- (六) なつかしい風 第七号・裏表紙裏
- (七) 聖書に秘められた絆 第八号・裏表紙裏
- (八) めでたい髑髏 第九号・裏表紙裏
- (九) 秦野今昔 第一〇号・裏表紙裏
- (一〇) 稲妻が照らすもの 第一一号・裏表紙裏
- (一一) 四〇の惑い 第二二号・裏表紙裏
- (一二) 真夏のモダンガール 第一三三号・裏表紙裏
- (一三) 出立と焼芋 第一四号・裏表紙裏
- (一四) 新茶の悔い 第一五号・裏表紙裏
- (一五) カマキリの乱 第一六号・裏表紙裏
- (一六) 御降三句 第一七号・裏表紙裏
- (一七) 夏椎子(一) 第一八号・裏表紙裏
- (一八) 夏椎子(二) 第一九号・裏表紙裏
- (一九) 雪子の入院 第二〇号・裏表紙裏
- (二〇) 松島の月 第二一号・裏表紙裏
- (二一) 秋三界を蔵すもの 第二二号・裏表紙裏
- (二二) 逃げゆく夢 第二三三号・裏表紙裏
- (二三) 火花と音楽 第二四号・裏表紙裏
- (二四) 猫の足痕 第二五号・裏表紙裏
- (二五) クシャミする寒月 第二六号・裏表紙裏
- (二六) 竹隠のひととき 第二七号・裏表紙裏
- (二七) ラジオ百年 第二八号・裏表紙裏

「リレー連載」

『学術誌ヒストリー』(二〇二四年)

(一)『東京物理学学校雑誌』を受け継ぐ 大石和江 第二五号・四六頁

- (一)『東北数学雑誌』と林鶴一 ハラルドクマレ 第二六号・四二頁
- (二) 境界線上の『科学』 秦皖梅 第二七号・四五頁
- (四) 初期の『Philosophical Transactions』を再読する 柴田和宏 第二八号・五一頁

『投稿企画連載』

- 『科学随筆U30』(講評・佐藤文隆／細川光洋) (二〇二四年)
- (一) ワイヤロープの振動と林業 すきおとひつじ 第二五号・七二頁
- (二) ポスト資本主義における科学と独学 佐藤悠大 第二六号・七〇頁
- (三) 技術発展が果たす意外な役割 植田康太郎 第二七号・七一頁
- (四) 茶碗の輝き 藤むすめ 第二八号・八〇頁
- 『科学随筆UN PASSAGE』(二〇二五年)
- (一) 雲とかなしみ 西一六八 第二八号・七八頁

「表紙画」

- 第一号 「白馬三山」(一九九〇年) 戸田盛和
- 第二号 「秋のスキー場」(一九九二年) 戸田盛和
- 第三号 「春」(一九九三年) 戸田盛和
- 第四号 「堂ヶ島」(一九九〇年) 戸田盛和
- 第五号 「夕映えの常念岳」(一九九四年) 戸田盛和
- 第六号 「安曇野」(一九九五年) 戸田盛和
- 第七号 「緑陰」(一九九三年) 戸田盛和
- 第八号 「林」(一九九二年) 戸田盛和
- 第九号 「小さな温室」(一九九二年) 戸田盛和
- 第一〇号 「土肥の海」(一九九二年) 戸田盛和
- 第一一号 「Design」(一九四〇年) 湯浅年子
- 第一二号 「五龍岳」(一九九一年) 戸田盛和
- 第一三三号 「弁天島」(一九九六年) 戸田盛和
- 第一四四号 「新年」(一九七四年) 戸田盛和
- 第一五五号 「小さな教会」(一九九三年) 戸田盛和

- 第一六号 「湯の宿」(一九九一年) 戸田盛和
 第一七号 「冬の公園」(一九九四年) 戸田盛和
 第一八号 「わさび田」(一九九三年) 戸田盛和
 第一九号 「下田港の朝」(一九九五年) 戸田盛和
 第二〇号 「すずき」(一九九二年) 戸田盛和
 第二一号 「別荘小屋」(一九九〇年) 戸田盛和
 第二二号 「箱根駒ヶ岳」(一九八八年) 戸田盛和
 第二三号 「青木湖」(一九九一年) 戸田盛和
 第二四号 「有明山」(一九九〇年) 戸田盛和
 第二五号 「フィヨルド」(一九九二年) 戸田盛和
 第二六号 「港を見おろす教会」(二〇一二年八月) 高木隆司
 第二七号 「高知県のモネの庭」(二〇一三年三月) 高木隆司
 第二八号 「夕焼雲と森林のかつとう」(二〇一二年九月) 高木隆司

裏表紙画

- 第一号 「歌う薔薇」(二〇〇〇年) 細谷暁夫
 第二号 「芙蓉」(二〇〇七年) 細谷暁夫
 第三号 「モクレン」(二〇〇六年) 細谷暁夫
 第四号 「桔梗」(二〇一〇年) 細谷暁夫
 第五号 「椿」(二〇〇〇年) 細谷暁夫
 第六号 「春」(二〇〇〇年) 細谷暁夫
 第七号 「ドクダミ」(二〇〇〇年) 細谷暁夫
 第八号 「水仙」(二〇〇六年) 細谷暁夫
 第九号 「アネモネ」(二〇〇六年) 細谷暁夫
 第一〇号 「千日紅」(二〇〇七年) 細谷暁夫
 第一一号 「ローズマリー」(二〇〇〇年) 細谷暁夫
 第一二号 「再開」(二〇〇一年) 細谷暁夫
 第一三号 「紫蘭(シラン)」(二〇一三年) 細谷暁夫

- 第一四号 「インドネシアの楽器」(二〇〇〇年一月二日) 細谷暁夫
 第一五号 「桜」(二〇〇九年) 細谷暁夫
 第一六号 「グロリオサ」(二〇一〇年) 細谷暁夫
 第一七号 「ボインセチア」(二〇〇七年) 細谷暁夫
 第一八号 「ゼラニウム」(二〇〇〇年) 細谷暁夫
 第一九号 「桔梗」(二〇一二年) 細谷暁夫
 第二〇号 「セローム」(二〇一二年) 細谷暁夫
 第二一号 「手燈てあかり」(二〇一二年一月三十日) 細谷暁夫
 第二二号 「柿」(二〇一二年十月二十八日) 細谷暁夫
 第二三号 「白い百合」(二〇〇七年六月十七日) 細谷暁夫
 第二四号 「落ち葉」(二〇一一年一月二七日) 細谷暁夫
 第二五号 「オオイヌフグリ」(二〇一三年四月二十日) 細谷暁夫
 第二六号 「ムーたん」(二〇一四年一月二十九日) 細谷暁夫
 第二七号 「青梅」(二〇一二年六月九日) 細谷暁夫
 第二八号 「秋」(二〇一三年一月五日) 細谷暁夫